
Lucky staR ~ 俺の人生を変えた物語 ~

太陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L u c k y s t a r 俺の人生を変えた物語

【Nコード】

N 0 0 6 0 0

【作者名】

太陽

【あらすじ】

柏木ひろ。彼は高校一年生。

オタクである。

彼はもともとオタクではなかったがとあるアニメのOPがオリコン入りしているのをみて目から鱗。

それから彼は色々な経験を経て立派なオタクに成長してしまった。

そして今日もいつものように秋葉原へ…
しかし何か騒がしい。

彼はそこで人生を変える出来事に会うことになるのである…

プロローグ（前書き）

はじめまして杉 樹です！初心者です…

これを読んで下さると幸いです！どうかよろしくお願いしますね！

（＾ー。＾）

ブローグ

警察官になりたかった

理由はわからない

小さかった時そう思っていたんだ

あの青い帽子と制服、トランシーバーがかっこよかったかもしれない

たぶんなんとなく

でも今はしつかりした理由がある

大好きな町を守りたい

大好きな風景を守りたい

そして大好き、と言う言葉はおかしいかな…「大切な人」をこの手で守りたい

そう決めたのはいつだっただろうか…

今日もいい天気だ…

久しぶりに行ってみるか…

全てが始ったあの場所へ…

聖地秋葉原へ…

全ての始まり

「オタク」

と言う言葉の定義について考えてみた。

萌えアニメや萌えマンガを読んばかりいる人？

部屋にフィギュアがある人？

秋葉原に通ってる人？

ふん…くだらない…

「全部当てはまっちゃるわああああ！！！」

俺は柏木ひろ。しがない高校生。

オタクである。いや、元々オタクじゃなかったんだけどなあ…

2年前かな…あるアニメのOPがオリコン入りしているのみて目から鱗状態よ、

あれをみた時俺の人生ガラッと変わったね！

今では棚にはフィギュア、壁にはポスター、こりゃ完全にきちちゃってるわ…

「46…ハアハア…47…ぐっ…もうダメだ…ハアハア…いや、ま

だやれる！…うおおお！！48、49、50ううううう！！」

別に良からぬことをしたわけじゃないよ！？

「地獄素振り…50本しゅくりょく！！ハア…よし！筋トレ終わり
！」

特製竹刀での股割り（自称地獄素振り）が終わり、俺の今日の筋トレは終了した…

オタクでも男の本分である筋トレ（そうなのか…？）は忘れてはいかん！

どんなに辛く苦しい筋トレでも俺は「萌え」を「エネルギー」変え乗り越えてきた！

故に今愛娘から流れている素晴らしい音色は無論！アニソンである！！

「さてと筋トレ終わったし、ネトゲでもするか！」

さっそくソフトを入れ、起動する。最近始めたばかりなのでまだレベルが低いのだが仲間になってくれた人たちもいい人ばかりだから楽しくやれてる。

「おっ！みんなもういるな…ちょっと遅かったかな？」
時計を見る。集合時間少し過ぎてるな…

H i r o「遅れてごめん（＜―＞）」

konakona「全然ok(^w^)じゃ揃ったし行こっか」

D・J「OK!まず手始めに」

HirOはまあ、俺の名前ね。俺実はおタクつてもそんなに業界用語とかわかなうのね。だからたまにおいてけりくらうわ…

だが始まったからには本気をださねば!

さてと、まだまだ夜はながい…

いくか!!

こうして夜は更けていく…

東京にある俺が行ってる高校はあまり頭はいい方ではないかな…

まあそこそこだと思う

「眠い……」

これはヤバいな…眠すぎる…昨日やつぱりやり過ぎたんだ

いつもは2時に落ちるのだから調子にのって4時までやってしまった…

おかげでコンタクトもつけてないよ…
授業どうすっかな…

「オッス柏木!」

バシンと背中を叩かれる。

いい眠気覚ましだ　かなりの力で叩きやがったな…

「っ…！おはよう…山川…目が覚めるおもいだったよ」

俺は背中をさすりながら言う

彼はもう一度オッスと言うと席に戻っていった

友達はまだ多いほうではないが俺は元剣道部なので現剣道部の彼とはコネがあった

先生が入ってきた

「おはよう諸君ら！…おい柏木シャキッとせんかシャキッと！コーヒー飲むか？メガシャキ！あははは！」

教室に先生の笑い声のみが響く

俺が滑ったみたいで恥ずかしい…

それよりもっと大きな問題がある…メガシャキってコーヒーだったっけ…？

昼休み

「オース！」

昼は別のクラスにいきみんなが集まって食べる

「おう」

「うつす！」

じゅんときつちゃんがあいさつをしかえしてくる

二人は俺の友達で俺達三人はいつも一緒に弁当を食べる「今日も寒いな」

「そうでもねえよ」

「あつそうそう、昨日のテレビ見た!？」

普通すぎる会話。

なのでちよっとおもしろくしてみようと試みる

「人一倍って言うけど実際一倍してもなんも変わらんよな」

「お前よくそんなくだらんこと思いつくな」

「あはは！確かにそうだね、変わってないな！」

まあこんなもんで勘弁

その時ちよつと思いだした

「あつ、そだ！今日ちよつとアキバ付き合ってくんね？」

つと二人を誘ってみる。好きなマンガの新刊が出るから行こうと思
っていたのだ

じゅんは鋭く「またか！？お前金もねえのによくいくなー一昨日も
一緒にいったじゃん」と俺が金がないのを知っていてそう言う

きつちゃんは「ごめん、今日バイトなんだ。すまんな」ふられる。

「そか、じゃあじゅんは…？」

「俺もパスだな。今日塾あるんだよ」

「オウマイグッドネス、ヒズオンザグラウンド！どうしてもだめ？
たのむよ」あまりの残念さに訳の解らん言葉を発してしまった

じゅんにはやはり「今日はマジで駄目」ふられる

俺は落ち込んだ素振りをみせる「そっか、そうだな…わがままい
つてごめん」

するとじゅんは「…わかったよ金貸してやるよ！ほら、ちゃんと
えせよ！？仕方ねえな…」お金を貸してくれた

俺はろくな死に方をしないだろう。そう断言出来るワンシーンだった

いや、別にお金欲しさでそう言った訳じゃないんだけどね

「ありがとうおお！じゅん最高！大好き！じゅんは俺の嫁！」

「気持ちわりいこと言うなー！ー！ー！」

俺たちのノリはいつもこんな感じだ

俺はオタク、じゅんは常識人、きつちゃんはまあマイペースかな？
そんな感じでなかよくやってる

実は三人とも部活やってたんだよなあ

俺は剣道部、じゅんは野球部、きつちゃんはサッカー部。

この三つはこの学校の「三大キツイ部活」と呼ばれるほどきつかったのだ

部活を辞めた理由はそれぞれだがまあ大変だったんだろ

「柏木の家の近く本屋さんあっただろ？たしか。そっちに行けばいいのに」

そついうきつちゃんに対して俺はこう答える

「いや、きつちゃん。確かに欲しい本マンガそっちに行っても手に入る…
しかし！その本屋で手に入るのは本だけ！ 聖地に足を運ぶ事によって！ポイントが！特典が！つくのだよおおおお！！」

「おおっ…なるほど」圧倒されるきつちゃん

言いきって満足げな俺

そして「いや、ツ○ヤだからポイントはそっちでもつくだろ。しかもアキバいくのに足代かかんじゃねえの？家反対方向だろ？」じゅん。

「それは言わないお約束!!」

人生が変わる瞬間

何がどうなってこうなってそうなった…？これはちょっと整理が必要かな？

さかのぼる事40分…

俺は結局秋葉原に一人でいった

実際ここに一人で来ることはあまりない

いつもはじゅんやきつちゃんや他の友達に付き合ってもらってるのだが…人にはそれぞれ事情があるからな。仕方ないでしょう

「おっ！あつたあつた」

とあるマンガの新刊を手にとり、レジに向かう。

読んでもらったように俺はビンボーヤージュなので三冊買ったりは出来ない…

それだけではなくお金が入ったら絶対買おうなど思っていた系目をつけていたグッズなどもお金が入った時には既に売り切れていることもある…

これで何度海水でもないのにしょっぱい水をグビツとしたことが…

やっぱり節約は大切だと思う。バイトしたいな〜きつちゃんうらやましいな〜。

「ポイントカードはお持ちですか？」

つと、とんでた

「あつ、はい、これお願いします」

このポイントたまる瞬間が幸せかんじるよね。

商品を受け取る。

「どうもです」

「ありがとうございます！」店を後にする

「さてと、帰るか…」

帰ろうと駅に向かおうとしたのだが、ふと反対側のショップの前あたり、というか横の路地？をみると俺ぐらいの身長の子三人？と制服姿の二人の女の子？が話しているのが確認できた

いいな〜俺だって女子とお話してえよ…でも恥ずかしいんだよね…

一度仲良くなったら普通に会話できるのだからそうなるまでちょっと…何と言つか…ね？後頭部辺りがかゆくなって目をみると言葉が出なくなるんだよね…故に只今高校生活始まって七ヶ月くらいたつけどガールフレンドは一人もおりません

ハア…

その男女を横目にみながら帰ろうとしたがおかしい…あいつら何やってんだ？なんで女の子制服なのに野郎どもは私服なんだ？しかもあんなところで…

不審に思っただけ自然をよそおいつつ近づいてみる…コンタクトをつけてなかったのが気づかなかったが言い争いをしているように見える…

「いいじゃんちょっとくらい付き合ってくれよ！」

「…ごめんなさい…それは…無理…」

なんぞこれ！？ナンパ！？俺は隠れるようにして様子を伺う

端から見ればそっちのが怪しいがナンパなんか初めてみるからちょっと見てみたくなってしまった…

女の子は二人共…めがっさかわいい！！

一人はエメラルドグリーンの髪の色で目は鋭くスラッとした体型でもう一人は…その子に隠れるようにして後ろにいるためわかりにくい…身長が極端に小さく桃色の髪の手をしてとても怯えているよう…

「いいからこいよ！！」男の一人が乱暴に女の子の腕を掴む

「いやっ…！やめて…！！」

「みなみちゃん！！」

スレンダーな女の子は声をあげる

それをみて小さい子は男に向かっていく！

「みなみちゃんから手を離して！」

「うるせえチビ！」

「きゃん！！！」

が、付きとばされてしまった…

…何だよ…この急展開…！！

俺、全身が震えてる…どうしたらいい…！？助けにいくか…？でも勝てるか？相手は三人だぞ！？まで…落ち着くんだ！ほら、人だつて通ってるだろ！？俺がいなくなつて…どうして素通りすんだよ！！！！見ろよ！女の子困ってんだろ！小さい子なんて涙目じゃん！だれか助けてやれよ…電車男だつてがんばってたじゃん…クソっ！どうして誰も…

誰も助けにいかねんだよおおお！！！！！！！！

そう思った時、一言。たった一言の言葉が脳裏をよぎつた…

「お前が行け」

うおおおおおおお！

柏木ひろ！

逝ってきます！！！！！！

決心がついた時、もう一人の自分…いや、おれの中の悪魔がこうささやく…

「いいのか？カッコつけていって負けたら恥ずかしいぜ？見ろよあいつら、たちわるそうだぜ？きつと負けたら全裸にされるな！！」

ここに来てまっパ宣言！？

「まけねえよ！！負けてたまるか！第一こんなところで全裸にされるわけねえだろ！？引っ込んでろ！！」

必死に抵抗する俺

もうスタートには立っているのに…！！クラウチングスタート寸前なのに…！！

「いいや。お前は負ける！相手は三人だぞ？勝てるわけないだろ！ほら、手足震えるてぜ？こわいだろ？お前ビビってんだろ？あっははは！」

だめだ…恐い…嫌だ…全裸にされたくない…そろそろこの下りダルいと思ってる読者の目も恐い…俺はどうせヘタレなんだよ…もう無理だ…帰ろっ…

そう思った瞬間だった！！

「まてい！その者たち！！オナゴから手をはなせい！」

と、勇ましい（？）声が聞こえた！

振り返って見るとよくわからん特撮もののヒーローみたいなカッコしたやつがいた！

「何だてめえ！」

男の一人が凄む。

ヒーローは「せつ、拙者は、あの、現代に生きる忍者、ナウニンジャーでござれ！！あつ、ござる」

忍者も凄む！！…？

まさか…かんだよなあいつ…！！？

男たちもちよつと呆れた様子で

「イタイんだよ、邪魔ださつさとかえれよ！！！」

と怒鳴る。しかしナウニンジャーは！

「そつそついうわけにはいかないでござる！早くオナゴから手を離すでござる！ さもないとこの神刀で…！」

「いいからさつさと帰れ！！！！！！！！」

ナウニンジャーはもちろん女の子達もビクツとなるほどの声で怒鳴る。(ちよつとかわいいかった…無論女の子がね！)

「す、すいませんでしたああ！！」

こっちに逃げてくるナウニンジャー。

俺、頭冷えた…

俺の将来の夢、警察官だよな…困ってる人、弱い人、守らなきゃ。

弱くてもナウニンジャー、がんばってたよな…かっこわりいと思つてたけどホントにカッコわりいのは俺だよ！！

そう気付かせてあんただ！ナウニンジャー！！！！

「ナウニンジャーさん！あんたの立場は俺が守る！だからあんたの神刀、俺に預けてくれ！！」

「ハア…ハア…へ…？」

「早く来いよ！オラっ！」

「痛いっ…！やめて…お願い…！！離してっ！」

「お願い！みなみちゃんを離して」

「うるせえつつつてんだろ…！！」

バシン！嫌な音が響く…

「う…うう…みなみちゃん…」

「ゆたか…！！いいから逃げて…！」

「駄目だよ！みなみちゃんを置いてなんかいけない！」

その時みなみはアイコンタクトをおくる。

（誰か人を…泉先輩を…！！）コクンとうなずくゆたか

そして助けを呼ぼうとして走ろうとした瞬間、別の男が手を掴む

「ほっと思ったけど人呼ばれたら厄介だからな！お前も来い
…！！」

強く握って引つ張ろうとする！

「痛い！いや、いやああああ誰か助けて！お姉ちゃああん…！」

「いい加減しれお前らコラァァ…！」

しまった俺もかんだ……！！じゅん……もう二度とお前から金はかりねえよ……

「またわけわかんねえやつがきやがった……なんだてめえさっさと消えろ！ 殺すぞ」

女の子の手を離し俺の胸ぐらを掴む……

プチ……って音がした……たぶん聞こえたのは俺だけ……

ゴッ！！
…ボタン…

迂闊に胸ぐら掴むんじゃないよ…アゴにカウンターくらうぜ…？

ニヤリと笑う。

「てめえええええええええええ！！」

もう一人、別の男が走ってくる。

オイオイ、そんなに走ってくるな……よっ！

.....

はいっ
た……！！！！

ボタンと腹部を押さえながら倒れこむ。

別に大したことをした訳じゃない。走ってくる相手に合わせて前蹴りをくらわせただけ…無論溝にな…！！！！！！

「オイ、な、なんだお前何で…！！」

「俺？俺はしがな！高校一年生。オタクだよ？びびりでヘタレなね」

「ふざけんなああ！」

鉄パイプもってきやがった…！！

がしかし…！！

ガン…！！

こっちには「神刀」がある…！！！！

ドスっ…！！

「…っ！」

「こっちにはこの模擬と…あつ！違う、神刀があるんだ。諦めろ」

柄頭で腹入れてやった…

「クソッ…！！！！」男は俺を睨みながらどこかに行ってしまった。後の二人の男も追いかけるようにして同じように…

フウ……今日から俺も「現代のサムライ」って名乗ろうかな……

ドツと汗が吹き出た！あああああ恐かった怖かった！俺死んでた
 ！！何か覚醒してなきや絶対死んでた！！こええええええ！！東
 京まじ恐い！なんで秋葉原にあんなのインだよ！恐ろしいなあああ
 ！！！！

「あの……大丈夫ですか……？」

ハッ
と我に
歸る！

そこにはあの小さい子がいた

「あつ！すいません！！そちらこそ大丈夫ですか…！？」

しまったかんだ……！もういや……緊張する……

「私は大丈夫です…！あの…助けてくれてありがとうございます！」

みなみと呼ばれる子も来て

「本当にありがとう……」と礼を言う。

かわいい……！！！！直視出来ない！！！！

ヤバい後頭部が：

「あつと、その、いや、俺なんか別に…何もしてませんよ!? あつ俺にお礼言つまえにあのナウニンジャーに…」

後ろを見るとナウニンジャー…いない! えっ!? 一緒に戦ってなかったっけ? 俺が「いい加減しろコラアアア」って言った時まではいた気がしたんだが…

あついた! 物陰にかくれ…何であそこにいる? 一緒に戦ってくれてなかったのか? 何かしてるな…。…? あー…俺の目がおかしくないのならば彼はこういつてる。

「グッジョブ」

あいつ逃げてやがったなああああああ! ……!!

えっ!? なんでだ!? 確か

「神刀あずけてくれっ」

「なんでござるか!？」

「あの女の子達を助ける! だからナウニンジャーさんの神刀を貸して欲しい!」

「えっ!? で、でも…怪我しても知らないでござるよ?。」

そっいつてナウニンジャーさんは模擬刀を貸してくれた

「心配してくれてありがとうございます！では逝ってきます！」

走って行くとした瞬間だった。その時

「まつでござる！拙者も一緒に戦うでござる！男がこのまましっぱ
巻いて逃げるほど恥ずかしいほどしっぱはもってござらんでござる
よー！」

…！？なんかおかしい気がするが…。まあいいや！

「そうですか！頼りになります！」

「さあいくでござる！！」

……って感じで二人で行ってたのに……

「……いえ、何でもないです……。それより早くこんなところより早
く大通りでましようか」

いかん、テンパって二回おんなじこといつてしまった…うおお…後
頭部が…。

二人はうなずいて俺について来るようにして路地をでた…

携帯で時間を確認してみると…うお、まだ秋葉原ついて30分ちょいしかたつてないのか…スゲー時間たっているように感じたんだがな…忍者どこいった…？刀返さないと…

「あのう…」

小さい子が声をかけてきた。

俺さっき敬語使ったが…高校生…だよな？

「あつ！はい、なんですか？」

「お名前きいてもいいですか？」

「へっ？あつ名前！？ああ柏木ひろです」

とりあえずフルネームで答えておく

すると

「柏木さん…えつと私は小早川ゆたかです」

「岩崎みなみです…」

「さっきは本当にありがとうございました！柏木さんがきてくれなかつたら大変なことになってたかも…」

横で岩崎さんがうなずく。

失礼だけどこの子たちナウニンジャーのこと忘れてないよな…

「いえいえ本気にしないでください！ あと二人共高校生…ですよね？俺は高校一年なんで敬語使わなくてOKですよ！」

フウ…やつと慣れてきたかな…？

二人は少し困ったように顔を見合わせる

あり？ちよつとフランク過ぎたかな…と思ったけど二人はニツコリ笑って（…かわい過ぎる…）

「う、うんそうするね！柏木くん！」とちよつと照れながら言ってくれた。

岩崎さんのほうも了承してくれたみたいだ…

「どうも！…それにしてもさっきはごめん…俺がもつと早く来てれば…」

すると岩崎さんは申し訳なさそうに

「柏木くんは何も悪くない…」と言ってくれた

小早川さんも

「そうだよ！柏木くんは悪くないよ！悪いのはあの人たちのほうだし…」

「いや、違うんだ…俺、本当はけっこう最初からいたんだけどさ…

怖くて動けなかった…逃げようとも思った…でもそんな時あの…さつきいた、ナウニンジャー…ってやつ。あれがきてからちよつと思ひ出したんだ…初対面の二人にいつても仕方ないかもしれないけど…俺、警察官になりたいんだ…理由はわかんないけどさ、警察官って困った人を助けるのが仕事だろ？だから二人が困っているのを助けられなくて警察官になれるかよって思ってたさ。かつこわりいよ…別の人が動くまでなにもしないなんてさ…あつ！ごめんペラペラ喋りすぎたかも…」

ちよつと焦る俺。次に口を開いたのは岩崎さんだった

モジモジとした様子で

「私はかつこいいと思う…。怖かったって言ったよね…？でも勇気を出して助けにきてくれた…。そんな柏木くんを私はかつこいいと思う…」顔を赤らめてそういつてくれた

俺は驚いた…そしてこの胸の奥が熱くなるのを感じた

しかし一番驚いていたのは小早川さんだった

みなみちゃんがこんなに喋るなんて…と思ってたそうだ。

すると「柏木くん、そんなに謙遜しないで？私達を助けてくれたのは事実なんだし！だからもつと自信もって！ね？」と小早川さん

はい！！！！自信持ちます！！！！かわい過ぎるううう！！この二人純粹過ぎる！！しかしそれ故か？なぜナウニンジャーのことを言たりとも口にしないんだ？二人が助かった理由の半分以上は彼にあると言っても過言ではないよ！？…まあ気にしないことにするか…この刀、どうしよう…

「え…と…二人共ありがとう！少しは自信がもてたよ！」

二人はまたニツコリ笑って返事をする。まさにキラースマイル！！

所でこの二人は何してたんだ？見た所オタクっぽくないし…家が近いのかな…？聞いてみることにする

「所で二人はアキバに何か用でも…？」
すると小早川さんが答えてくれる

「あつ私達は用があるわけじゃないんだけど…」

どゆことだ？

「…え？そうなの？」

「うん、実はお姉ちゃんとみなみちゃんと三人で来ててね？ここに用があるのはお姉ちゃんなの。私は帰りにお姉ちゃんと夕飯のお買い物しようと思って…みなみちゃんはついてきてくれたんだ！」

納得。

「ああなるほど。あれ？そのお姉ちゃんとやらは…？」

「それが…」

「ちょっと見てくるからゆーちゃんたちはまって！」

「えっ？せっかくだからついていくよ？」

「いいの！ゆーちゃん達にはまだちょびつとはやいから！」

「ええええええ／＼／＼」

「それから中々戻って来なくて…」小早川さんは心配そうに件のシヨップ周辺を見る

岩崎さんも同じく心配そう…

全く！なんてお姉さんだ！妹達を待たせてあんな怖い思いをさせて！！ここは相手が年上でも一言ガツンと言わないとな！

（本人はじゅんやきつちゃんに全く同じことをしていることに気づいていない模様…）

すると小早川さんは「あっ！戻ってきた！おーい！！こっちだよー！！」と手を降ってる。

おっきたか…どれどれ…？んっ、あれか…？あの手にいっぱいなんかもってる…えっ…？あの人もなんか妙に小さいな…あっ！なんだ遠近法か！なるほどな。違い！！ホントにちっさいんだ！

俺はしばらく呆気にとられる…

「ごめんごめん。だいぶ待ったでしょ。ホントにごめん」

彼女は言った

小早川さんは「ちょっとくたくたかも」…と笑いながらそれに答える

えっ！？それでいいの？この人のせいであんな怖い思いしたのに…
まあ…それだけ姉妹仲良いつてことなのかな…

「みなみちゃんもごめんね！お詫びに先輩がゆーちゃん達に何か
おごつてあげよう！」

「えっ！？いいよゝ悪いし…」小早川さんはそう言う

岩崎さんも遠慮がちだ

それにしても見事に俺そっちのけだな…別にいいけど…

「いいからいいから！ちょっとあそこよつてこっ！」
つと半ば無理矢理二人を連れてこつとする。

その時不意に彼女と目があう。

「おつとそろそろツツコンどこつかな…？。所でさ…キミ誰？」
ちよつと目が怖い…

「えつと俺は…その…何と言つか…」これはテンパる…

「もしかしてナンパ？駄目だねえ…ゆーちゃん達の優しさにつけてんで悪さしようとしてもそうはさせん！！」

小早川さん達が必死に弁解しようとしてるのだが妹達を守ろうとしているためか！？その妹達の言葉に耳を傾けていない！！

「ゆーちゃん達はちょっと待ってて…」

その瞬間ヒュっ…と風切り音が聞こえる

俺は咄嗟に目の前にとんでくるものを避ける！！！！！！

「うおっ…！！」速すぎる！！彼女の拳が頬をかすめる！！

「中々やるな…ならばこれはどうだ…！！」

次々と技が繰り出される！俺はそれをさばくので精一杯だ！

「ちょっと、うあつと！待って、うお！下さい！うわっ！」

「問答無用！私と言葉を交える事ができるのは私と拳を交え、勝利した者のみよおおお…！！」

必死に間合いをとる！

なんだこの人…！半端ねえ！小早川さん達を見るとオロオロしている…！あてにはできそうにない…これはちょっとこっちも本気でや

らねばならんか…？

「さあ少年！かかってこい！」

いいだろう…誤解を解くには勝たないといけない…

この戦い！俺の勝利で幕を閉じる…！！

……………これでわかったでしょうか。

何がどうなってそうなってこうなったかが……

ここまでわずか40分…

さて…やるか！！

輪は水辺の波紋のごとし

ぐっ……！駄目だ……！何という速い動きだ……！俺の攻撃は全てさばかれる！

「うおっ……！」

刹那！

俺の放った拳は見事にかわされ足をかけられそうになる！

あ、危ない所だった……！

慌てて間合いをとる！が、その瞬間相手は間合いをつめてくる！

くっ中々きついな……だが甘い！間合いが近いということは俺の「投げ」の間合いに入るということ！

「とつた！失礼！」

すかさず首に手をかけそのまま足をかける！

ダンッ……！！

……！！？

なぜ俺が地面に倒れている！？

あの状態でどうやって反された！？

「チツチツチツ…まだまだだねっ！」

少女は余裕の笑みで手招きをする…

俺は咄嗟に起き上がるが、足がフラフラだ…俺は体力が極端にない！大体なんでこんなことになったんだ！？俺はナンパなんかしてないのに！！クソっもうだめか…？

そんな時、日本で、いや、宇宙で一番熱い男の言葉を思いだす…

…いや、駄目じゃない！！俺はあきらめない！まだだ！まだやれる！
落ち着くんだ…！まずは相手を良く見ることに！そして考える！

……………

動きにキレとわずかな規則性があるな…

そして見ず知らずの相手にも臆することのない度胸！

あの理不尽投げ返し！

格闘技の類をやっていたに違いない！

ならばこつちもありったけのフェイントをかけ仕掛けてきた所を力
ウインターで仕留める…！

といってもカウインターはさすがに…

いくら強いって言っても相手は女の子！

ましてや小早川さんのお姉さん！

カウンターは危ない、

無理だ！

って言うかカウンターなんか当てられるかつ！

ここで説明しよう！！

くさっきの勝利についてく

柏木ひろがさっきの対不良戦で生き残ることができたのはある条件が整っていたからである！！

条件その1！

相手が襟首をつかんできた！

これは先制攻撃のチャンス！アゴにヒットさせることができる！

条件その2！

相手が冷静さを失い突っ込んできた！

冷静さを失っているためカウンターの蹴りをかわすことができなかった！

条件その3

柏木ひろは武器をもっていた！

彼は剣道をやっていたため素人との武器での戦いで負ける自信がなかったのだ！

条件その4

敵は一斉に来なかった！

もし三人一気に襲ってきたら柏木ひろは今頃地面となかよしこよしだっただろう…

そして条件その5…！柏木ひろは冷静さをもっていながら熱い男だった…

それだけだ！！！！

もうただ単に運がよかっただけとみえる！！

そんな彼が格闘技経験をもつ彼女に勝てるのか！？

では失礼……………

…！攻撃してもさばかれ反撃される！カウンターも出来ない！投げも返されたやつしか知らない！！どうすれば……………！！

考える間も攻撃は繰り出される！

たぶん俺剣道やってなかったら最初の突きでアウトだったな……

剣道か……

懐かしいよな。あの時はヤバかったな……恐怖さえ覚えたよ……相手は強豪でかなりでかくてさ、あつ、無論負けたがな！！でか過ぎるんだよ！その上速いんだ！あれはチートだよな……

………！？

……わかったぞ！！！！
そつか！勝てる！！！！

俺はチャンスを狙う！相手はそれを読んだのか攻撃の手数が少なくなる……

だが甘アアアい！！

俺は大きく一歩でる！！

上段！！相手は片手でそれをガードしようとする！

がそれはフェイント！俺は空いた所に打ち込む！

少女はハツとし、慌てて両手でガードしようとする！なんて反射神経だ…！完全にガードが間に合う！

が、それもフェイントだあああ！

この瞬間を待っていた！俺は彼女の両腕を掴む！！

ニヤリ…！

俺の…勝ちだああ！

確かにこんな組合い全然したことない俺と格闘技経験のある彼女の間にはかなり大きな実力差がある！

しかし！！圧倒的に俺に有利なものがあつた！！

それは筋力差と体格差！！

横になぎ倒されようが蹴られようが俺はもうこの手は離さんぞ！！
よし！このまま押し倒してくれるわ！ふははははは！ 変態

………

「あちゃーもう少しだったね…残念！」

「は…？」

彼女の体勢が急に低くなる

それと同時に彼女も俺の手首を掴み足を俺の胴体に………！

…足が浮いた…？

「えっ！？あっ！？ちよっ！まっ…！」

「しっかり受け身とつてね…！」

「うおおおおおおおおお…！」

最後に脳裏に浮かんだのは二人の笑顔だった……

H i r O i s o v e r…

「知ってたあああ！？」

「うん、もちろん全部知ってたよ。」

俺はびっくり仰天！

先程見事に巴投げを食らった俺はそこで戦闘を続けることは不可能と判断し、降参してしまった…

「…もう無理です…降参します…参りました…うぐっ …バタっとな」

俺はギブアップした。

「か、柏木くん！」

かけよって来てくれる小早川さんと岩崎さん

「ああ…大丈夫っす。」

実際芝居なので平気なのだが…

「ごめん、ちょっと離れてて」

俺はちょっと見せ場を作るため仰向けになり、腰をまげ、手を頭の横につけ、勢いをつけて…よっ！

ダンッと！

成功！小早川さんのお姉さんも、おー、と言う顔でみている

俺も少し得意げになる

そして色々聞こうとして少女に話しかけようとした

その時！

すると周りからは拍手が聞こえてきた！ピカピカひかつてる！！

「えっ！？」

いつの間にかギャラリィがたくさんいる！！ちよっ！カメラは勘弁して！全然気づかなかった！まあそりやそうだ。こんな街の真ん中でこんなことしてりや人も集まってくるだろ…

俺はもちろんあの小早川さんのお姉さんも驚いているみたいだ

すると

「おお…！これはちよつと困った事になった…うん！事情は後で説明するからさっ！ついてきてよっ！ゆーちゃん達も早く早く！」そう言っただけは凄いスピードで人ごみを抜け、走っていった…

はっ！？事情？何の事！？

「ちよっ！待って下さいよ！！」俺は慌てて追いかける！

小早川さん達も

「えっ！？待って…！お姉ちゃん！！」必死に追いかける！

何なんだあの少女は…！！！！！！！！！！

「ハア…ハア…ゴホッ！うえ…ハア…ハア」死ぬ…

「ハア…中々やるねーきみ！ハア…だいじょぶ…？」

彼女はうつむいている俺の顔を覗き込む。俺は死にかけてたがこれだけはわかる。この子も死のほどかわいいいい！！！！

さつきは気づかなかったが凄く可愛いな…

この薄紫青色の髪の毛、ミントグリーンの瞳、そしてこのアホ毛、泣きばくろ！身長！貧（ry！

日本に生まれてよかった…

「ハア…ハア…ちよつと大丈夫じゃないかもです…ハア…ハア…所で小早川さんたちは…？」

キヨロキヨロと見渡す二人…

すると遠くのほうから歩きながらくる二人がみえた

「ちよつと…ハア…ハア…お姉ちゃんもハア…ハア…柏木くんも…速すぎるよ…ハア…ハア…」

小早川さんは岩崎さんに支えられながらゆっくりと向かってくる

「ゆーちゃん達ホントにごめん！！！！大丈夫！？」

少女は慌てて駆け寄る

何なんだこれ…今日はよくわからん日だな…

「やっと全員揃ったね。じゃ、このお店入ろうよ!」

建物の三階

ふと見ると…コスプレ喫茶…!?

俺はちょっと…

小早川さんもちょっと抵抗がありそうだ…

気にせず入ってく少女…

もういいか…今日はスーパー振り回されデイド…

「小早川さん、岩崎さん、行こっか。」俺も入ることにする

「う、うん…」

二人もついてくる

「お力エりなさいませ!ごシュジンサマ!」

えっ!?!ミ〇ル!?!ってか外国のかた!?!可愛いな…

「パティちゃん!？」

後ろで小早川さんが驚く

えっ…?何じゃ…?

知り合い?

「パティお疲れー!きたよー」

「Oh!こなた!お力エリデス!…ゆたか!みなみ!ダイジョウブデスカ!?ケガはありませんか!?!」

「えっ?パティちゃん?」

…?

何で?

小早川さんも岩崎さんも状況が把握出来てないよう…

「シンパイしました!…!アレっ?こちらはどちらサマデスカ?」

ふと目があう…

う…また急に殴られないよな…

「あ、この人がゆーちゃん達を助けてくれた人。」

はっ！？何だと！？

「Oh！ホントデスカ！　ワタシのトモダチタスけてくれてどうも
アリガトうございますー！」

ペコリとお礼をされる

「あつ、いえ…って言うか、えっ！？どういことですか！？」

少女にとつ

「うん！お姉ちゃん、どういこと！？何でパティちゃんが知って
て、えっ？お姉ちゃん知ってたの！？」

小早川さんもしびれをきらしたようだ

「えっと…」

少女はちよつと焦る

「まま、たちバナシもなんですカラ、ナカへどうぞ
パティちゃんとやらがフォローする」

「そ、そうだね！そうしょー！さ、いいいこー！中て説明するから
！」

少女はそそくさと入って行った

「あっ！ちよつと待って……」

「さ、みなさんもうござ

店内に向かって手をさしのべる

「柏木くん、行こ……」岩崎さんが俺を誘う

「そ、そうだね……小早川さんも行こつ」
「うん！」

「OK！四名サマご案内デース」

「おーいこつちでござるよ……」

店のテーブルに座っている人物を発見する

あの恰好、あの喋り方あれは……あいつは……！

「拙者でござるよ！ナウニンジャーでござるよ……！！……」
「うおおおお……いたああああ……！！」

何だあいつは！神出鬼没か！？何なんだあああ！あっ！これ返さなきゃ！

「あつ、泉さんどうもでござる！あつ！アニキーー！よくぞ無事で！心配したでござる！オナゴたちも無事でよかったでござるなあ！」

「アニキー、じゃないでしょー！一緒に戦うっていったじゃん！何で逃げてんの！？こっちはむちゃくちゃ怖かったんだよ！もうっ！……って知り合い！？」

「お、落ち着いて！柏木くん！」

「ご、ごめん……」

小早川さんになだめられる……ちよつと熱くなってしまった……

「えつと……ご、ごめんなさいでござる……自分も怖かったんでござる……面目ないでござる……」

く、空気が……悪くなった……！どうにかせんと……

「べつ、別に責めた訳じゃないよ……いや、俺も怖かったしさ……実際俺を動かしてくれたのナウニンジャーさんだし……そ、そんなに謝らなくても……お、俺も言い過ぎたよ……」

「ア、アニキーー……！！ありがとうでござる！一生ついて行くでござる……！……所でいつ拙者がアニキをうごかしたんでござるか？」

「い、いやそれは……ああ！いいじゃん！なんでもないよ！それより早くすわる！」

やけになってしまった……

「ツンデレ？」

耳元で少女が囁く…

「うおう！…ちよっ！違いますよ！それより事情説明してくださいよ！」

ああああ！むちゃくちゃだああああ！！

落ち着こう、落ち着こう…他のお客さんもみてる！

「…すいません、取り乱して…」

「気にすることないでござるよ！さあ皆さんもお座り下さいでござる！」

なんであんたが言うんだ…

皆も苦笑いで座る…少女以外は…

「では今から説明会を始める！！」

少女の声が響く

パチパチパチパチ

「っの前に自己紹介しとくね。私の名前は泉こなた。よろしく！ちなみに私高校三年だから」

やつと名前わかったな、ん？泉…？小早川さんのお姉さんなのに…？まあ後で聞くか…最後のは敬語使えって意味だな…こなた…？

「拙者はナウニンジャーでござる！…えっ！？本名いや、それは…わかったでござる…本名は坂上なおとでござる！高校一年生でござる。よろしくでござるよ」

同学年だったのか…いつまでこの喋りかた続けるんだ…？
って本名普通だな…

…あつ俺か…

「柏木ひろです。高校一年生です。よろしくお願いします」

泉さんはそこで何故か少し考えてしばらくして元の顔に戻った

「はい！自己紹介終わり。じゃあ説明始めるよ！」

「ごめんごめん！ゆーちゃん達おまたせー…ってあれ…？」

辺りをみまわすがゆたかもみなみもない…

「二人ともどこ行っただろ…んっ？」

あれは… 何やってんの…！？

ふと見たところには怪しい恰好した人が路地を覗いてる…

怪しいのでほっとうと思ったが、ゆたか達がいなくなったのと関係あるかもしれないのであなたは声をかけてみることにした

「ちよつとその人…何やってるの…スゴく怪しいよー？」

すると彼は振り返ってけう言った

「えっ？そつでござるか！？って今はそれ所じゃないでござる…！」

なんか慌ててるので何だろうと思い彼女も路地をみる…

「…！！」

そこにはゆたかとみなみガラの悪い男に手を掴まれているのが見えた…！そして手前では制服姿の刀みたいなのもった男子が何か叫んでる…

「ゆーちゃん…！」

助けにいかなくちゃ！

そう思つて走り出した瞬間彼女は腕を掴まれた！

「…！？離して！」あの怪しい男だ
彼女は掴んでる腕を必死に払おうとする

「待つでござる！彼は今戦っているでござる！男の戦いでござる！
彼は怖くて逃げだした拙者の立場を守ってくれと言って戦いに行
ったでござる！初対面の拙者にでござるよ！？だから信じて待つで
ござる！頼むでござる！」

彼は必死で訴える。

彼の言い分はわかったがやっぱりほつとしてはおけない！

「言いたいことはわかるけど…もしあの人が負けたらゆーちゃん達
がどんな目にあうかわからないよ！私は助けに行ってくる！！」

そう言うて行こうとした時彼女は目を丸くする！

さっきのガラの悪い男の二人が地面に体の箇所をおさえながら倒れ
こんでいる…！そして少年は刀を抜いて最後の一人とつばぜり合い
になっている…！と思った瞬間相手は腹を押さえて膝まずいていた…
しばらくして不良は三人ともどこかに行ってしまった…

「スゴい…一人で全員倒しちゃってる…！」

「ほら、言った通りでござる！」

怪しい人は得意げになっている

「あつ！お礼しないとっ！……」

…所あの少年どうやってあの不良二人倒したんだろ…一瞬だった
よね…気になるな…

…元武道家の血が騒ぐ…！

「ねえ、〇〇ビルの三階のコスプレ喫茶知ってる？」
怪しい人に言う。

彼は何か合図を送っていた

「へっ？ああ知ってるでござるよ。それが…？」

「そこに行つて待つてて！後で言いたいこともあるし！」

「えっ！？別にいいでござるが…あつ、一言いつてから…」
彼は少年の所に行こうとする

「ちょっと待ったー！あの人には内緒で！早く！」

彼も少し焦つて

「わ、わかつたでござるよ…。所でお主はどうするつもりでござるか？」

ニヤリ…！

「私はちよつとやることがあるから…じゃ、あとでね」

「り、了解でござる…」

彼は走つていった…

おつとおつちに来る！

彼女は慌てて店内に戻りトイレに…

「すみせんアニキ…」
また謝られる

何だ…じゃあ全部仕組まれていたことだったのか…！？

…まあ去ったことだ。気にしないでおう…

「では気を取り直して…柏木くん…でいいかな？柏木くん、ゆうち
やんとみなみちゃんを助けてくれてホントにありがとう！！お礼と
いったらあれだけど…好きなもの頼んでよ！もちろんゆうちゃん達
もね！」

「えっ…いいんですか？」

ちよつと戸惑う。初対面の人におごつて貰うって何か変な感じだ…

「いいのいいの。遠慮しないで！ほらゆうちゃん達も！」

「ホントにいいの、お姉ちゃん？…じゃあ、わたしは…これ！」

「じゃあ…私はミルクティーをお願いします…」

二人は頼み始める

「オッケー！柏木くんは？」

おつと、ここはまあごちそうになるか…

「いいんすか…？じゃあ俺は…このカフェオレをお願いします」

「拙者は！？拙者もいいでござるか！？」

がめついな…

「坂上くんはゆーちゃん達助けてくれなかったからなー。どうしようかなー」

「そんな意地悪いわないでくださいでござるよー」

小早川さんと岩崎さんの顔から笑みがこぼれる。

俺もつられて笑ってしまう…

なんだろな…初対面の人ばかりなのに何か落ち着くっていうか…じゅんやきつちゃんという時と同じような感覚だ…しかも三人女の子…まるであの時を思いだすな…

おう、思い出に浸ってるんじゃない。今はこの時間をたのしもう…

「なるほどいところ関係なんですか。でも何で『お姉ちゃん』?」

俺は訊ねる。

「え、と…それは私が小さい時から面倒みてもらってたからかな…昔からそう呼んでたから」

小早川さんが答える

なるほど、謎が解けた。残っている謎は…何故か泉さんとは初めて会ったって感覚がしない…それと…それと…

「どうしてお前がそんなにイケメンなんだってことだけだ！」

なおとを指差す（この短時間でだいぶ仲が良くなった）
急に指名され驚くなあと

「へっ？拙者でござるか？イヤイヤ、アニキに比べたらこんなの大したことないでござるよ」

なんだこれ！？謙遜か嫌味か…！？

…さっきまではよくわからなかったがマスクをとった瞬間このイケてるメンズ！

「でも柏木くんもけっこうモテそうな顔してるよね」

泉先輩からありがたいフォロー…

「あ、ありがとうございます…でも今はむなしい…」

カフェオレをすする…

なおとは少し申し訳なさそうにする

ホントにイケメンだな…金髪に中々高い鼻、けっこう身長も高いし…

「と、所でみなさんはどこの学校でござるか？」

さつと話題を変える

「私たちは陵桜学園！。埼玉にあるんだけど…知ってる？」

聞いたことあるな…

「陵桜…？あの結構偏差値たかい？じゃあ泉先輩たちだいぶ頭いいんですね！」

実際スゴいと思った

「まあねーそれほどでもないよ！ふっふーん」

泉先輩先輩は得意げだ

「柏木くんは…どこの学校…？」

岩崎さんに聞かれる

…キレイな声だな…声優なれるんじゃないか…？

「あつ、俺は…あんまり頭よくないけど…東商高校…」

「へー…どこ？」

知らないか…

「…あ。知ってる…家の近所…」

…！岩崎さんが知ってるってことは…

「えっ、じゃあ岩崎さんの家あの住宅街のどこか！？」

コクリとうなずく

あのお金持ちが住んでるあの住宅街！岩崎さんブルジョワだな…

学校から帰る時いつもあれを見ながら帰ってた…いいな…と思いながら…世の中せまいよな…

「あつ！柏木くん！間違ってたらごめんね！」

！？

急に泉先輩が話し出す

「えっ…何ですか急に…？」

「柏木くんって本名『ひろ』だったよね！？もしかしてあの『Hi
ro』くん！？」

！！！！

誰もわからない…

俺以外は！

すべての謎が解けた…なるほどな…

「じゃあ泉先輩は…あの『konakona』さんですね！」

「イエエエス！！」

うおおおおお！繋がった！！

スゴい！こんな偶然あるのか！？

「スゴい偶然！！こんなことも有るんだねー！…フラグキタコレ！」

俺は少しドキツとする…ちよつwwフラグって…

「その説はどうもありがとうございます！色々アイテムとか…え、と…これからもよろしくです！」

「うん、よろしくー！じゃっ、柏木くんじゃなくてひろくんでいいね！」

！！！！

ひろくんか…昔を思いだすな…悪くない！！！！

「ぜひ！」

「あの…お姉ちゃん？どういつ…？」

小早川さんがたずねる

「ん？実はね、柏木くん今私がやってるネットゲで一緒にパーティーくんでる人でね！その時のネームが『Hero』だからリアルでもそう呼ぶことにしたってわけ。ゆうーちゃん達もそうしたら？喜ぶよー？」

ニヤニヤと笑ってる泉先輩

ちよつと困ってる小早川さん

「え…それは…私男の子を名前で呼んだことないし…ね、みなみちゃん？」

可愛い！わかるかな！？この、なんか、顔赤らめてモジモジしてる様子！

「え…う、うん…でも…私は別に構わない…」

岩崎さん！！！！！！

感動で柏木王国の住民たちは拍手喝采であつた

「え…じゃあ私もそうしようかな…いいかな、柏木くん…？」

ドギャーーン！

「も、も、もちろんだよ…！」

コレを断る愚か者がいるだろうか！いや、いないだろう！ 反語

「じゃあ私もそうするね！よろしくね…ひろくん…？」

えー…全国の「ひろ」と名前のつく諸君。幸せとはまさにこのことです。あっはははははは…！！

「よろしくです…！！！！…っっていうかよろしく、とかひろくんとかなくてもどうするんですか？学校も違うし家も知らないし、また会えるかどうかかわからないし…」

ここで一気に興奮が醒める…

すると泉先輩

「心配することないと思うよ。ひろくん結構アキバな人だからここにきたら結構会えそうだし。後私達ネットゲ仲間じゃん？…それに私たちにはこれがあるではないかー！」

つと携帯を取り出す！

おお！なるほど！その手があった！…って女の子とメアド交換！？願ってもないことだが…少し緊張するな…

「なるほどですね！って何でおれがアキバな人になるんですか！！否定はしませんか…」

そこは気になった

「んー…長年の勘ってやつかなー…つかひろくんさ！普通にアキバにいるじゃん！」

あ、そつか。納得。

すると彼女は小声になり続ける

「…後ゆーちゃん達見る時の顔がね…なんかそれっぽいよ…？」

おおー…！気づかれてたか…！じ、自重せねば…！

「え…、何のことですかー？あはははは…！」

笑ってごまかす事にした…

「あゝ拙者のことわすれてないでござるか…？」

…！忘れてた…！

「ご、ごめん！なあと…で、なあとはこの高校なんだ!？」

ちよつとかわいそうなのでそう慌ててきくと明るくなったのでホツとする…

そして意気揚々と話し出す

「拙者は…」

「あつ！…！」

その瞬間小早川さんが…なあとをいじめる訳じゃないよな…

「ごめんね坂上くん！お姉ちゃん！お買い物しないと…！」

買い物？確かそんなこと言ってたな…

「あつ！すっかり忘れてたー！！い、いま何時…ろ、6時過ぎてる！！もう帰らないと！！お父さん待ってる！！」

6時…！？俺も時計を見ると確か6時すぎてる！！やべえ！！！！母さんに○される！！

「ちよつ！俺も帰らないと！ごめんなあと！また今度な？ほら、メアドも交換しよな？」

赤外線でとりあえず俺を送っておく

そして俺たちは慌てて店を出た…

「グッバイ またきてネ」

電車に乗ったとき皆息をきらしていた…

「ハア…ハア…とりあえず間に合いましたね…」

「ハア…うんホントによかった…コレ逃すと7時になるとこだったよ…」

あの後俺たちは急いで駅に向かった

なおとは家が秋葉原に近い所にあるそうなので途中で別れたのだ…
羨ましいな…

「いやー今日は私の都合で皆をつきあわせてごめんね。」

泉先輩が謝る

「いえ、そんな…こちらこそおごっていたいて…ごちそうになりました!」

「いいのいいの。ひろくんはゆーちゃん達の命の恩人なんだし!」

そう言われるとちょっと恥ずかしいな…

「うん!そうだよ!今日はホントにありがとう!」

小早川さん…

…謙遜しても仕方ないよな…

そう思ったので俺も笑顔でこう返した

「どういたしまして！」

電車が徐々にゆっくりになる

次の駅についたようだ…

「あつ、私たちここで乗り換えだから。後でメールするね！ひろくんもみなみちゃんも今日はホントにありがと！それじゃ、またねー！」

「ひろくん、みなみちゃん今日はありがとう！ひろくんはまた会えるといいね！みなみちゃんはまた明日！バイバイ！」

手をふる二人…

二人ともお別れだ…なんかちょっと寂しい…

「それじゃ！また！」

「さようなら…ゆたか、また明日…」

こっちも手をふる

二人の姿が扉で見えなくなる…ガタン…電車がうごきだした。彼女達を残し、電車は次の駅に向かおうとしていった…

フウ…俺はもうちょい先だ

い、岩崎さんと二人きりか…

………

喋らない……

何か話題を…

………

…くっ！こっという時に気のきいたことができないから俺はもてないんだよ…！

………緊張するな…

「今日はありがとう…」

「へっ？あ、ああ…うん、どういたしまして！」

急に喋りかけられ少し驚く…

「所で腕は大丈夫ツスか？結構強く握られてたみたいけど…」

気になっていたが言うタイミングがわからなかった…ホントは最初

にあった時から言うべきだったんだろっけど…やっぱりそういっとなんだろな…気遣いつて。

「えっ…あっ…私は大丈夫…」

岩崎さんはそう言うけど…

やっぱり心配だな

店にいるときからちよくちよく押さえてたし…

んっ！ちようど次の駅についたな…よし！

「ちよっと待ってて」

「えっ？」

俺は降りてトイレに走る

別にしたかったわけではない

…あつたあつた。

俺はハンカチを取り出し蛇口の水でそれを濡らす。
よく絞って…OK！

っと急いで戻らないと！

電車に戻ると岩崎さんは心配そうにしていた

「ハア…ハア…ごめんごめん！これ、よかったら使ってよ。あっ、

汚くはないよ？」

岩崎さんは少し驚いたような素振りをみせ、クスツと笑い、それを受け取る。

「ありがとう。ひろくん…」

…っ！やっぱりかなわない…

こっちもニツと笑って返した

岩崎さんは袖をめくり患部にハンカチを当てる

やっぱりちょっと赤くなってるな…

俺がうじうじしなければ…！

すると岩崎さんはまたクスリと笑う

「…？どした？」

「懐かしいな…私がゆたかと初めて会った時に少し似てる…。きっと今日の出会いは特別な出会いなんだ…。あ、私降りないと…」

どうやら岩崎さんが降りる駅についたよう

俺は岩崎さんが言っていることがよくわからなかったが、そっか…

と一言だけ言っておいた…

「ひろくん」

岩崎さんが手を差し出す。

あ、握手……！？

一度手を背にまわしてよくふいてから俺も手を出す…

うわあ…や、柔らかいな…女の子と握手なんて…何年ぶりだ！？

「今日はホントにありがとう…またどこかで…！」

「っす！じゃあまた！」

岩崎さんは振り向き電車から出ていく

扉がしまる…俺は一人になる。

今日はいったいどれだけ「ありがとう」と言われただろ…

何か不思議な日だったな…こんな出会いは初めてだ。きつと岩崎さんが言ってた「特別な出会い」ってやつなんだろ…時間は遅くなつたが悪くない気分だ…うん。悪くないな…

俺をのせて電車はまた次の駅に向かっていく。

家

「ハァーいい湯だった」

あの後帰宅した俺はこつてりと絞られた…

どうにか夕飯までには間に合ったのだが…まあ結構修羅場だった。
危うく秋葉原禁止令がでるところだった…

「フウ…今日は疲れたからもうねるか…んっ？」

携帯を見る

「Eメール 4件」

欲は抑制しがたし嫉妬は醜し（前書き）

今まで俺は逃げ続けた人生を送ってきた…とまでは言わないが確かに俺は逃げた

なぜ頑張れなかったのか…そう後悔した…いや、してる。悔しいから…悔しかったから…俺はもう逃げない

苦しいことや辛いこと…生きていく上で避けることの出来ない大きな壁…なんとしてでも乗り越えてみせる！
証明してやるんだ…

俺は…

欲は抑制しがたし嫉妬は醜し

あれから3日間たった……………

泉先輩とはネットゲで会っているのだが小早川さんや岩崎さんからは何の音沙汰もなしだ

…今日は土曜日か…

朝起きた時には両親は既にいなかった

そう言えば昨日の夜妹の試合があるって言ってたな…

暇だな…

じゅんか上条（クラスの友達）でも誘ってあの場所にでもいこうかな…

「〜」

おっ、電話だ

どれどれ…

「坂上なおと」

……フウ、珍しいな…何か嫌な予感がしないこともない…

「…はい、柏木です」

『あ…アニキ…助けてください…早く…うう…お願いします…○○町まで早く……ちよっ!!……ブツッ、ツーツーツー』

「なおと!?!もしもし!?!」

な…何が起こつたんだ…ひよつとするとまたあの不良どもが…!?!くっ…許せない…!!あのなおとを普通の喋りかたにさせるくらい怖がらせやがって!!よし!待ってるよ!なおと!!!!

俺は急いで朝飯を食べ、急いで歯を磨き、急いで顔を洗い、急いで髭をそり、急いでコンタクトをつけ、急いで髪を濡らし、急いで乾かして、急いでワックスをつけ、急いで新聞をチェックし、急いでフィギュアを眺め、急いでアニソンを1、2曲聴き、急いでドアをあける!急いで戻って、急いでフィギュアをまた眺め、

そして急いで駅に向かうのだった…

20分後…俺は町についた

ハア…ハア…大分遅くなった…クソッ!電車め!ちんたら走りやがって…!

なおとは…なおとは無事か!?

○○町とは言ってたが…一体どこだ!?

ここはいわゆる町である

まあ普通にデパートもあるしホビーショップとかもあるから、よくじゅんたちと来たりするのだ…

それより早くなおとをさがさなきゃ…！

どこだ！？

ゲーセンか…？

わからんがとりあえず行ってみよう！

（ゲームセンター）

（

…相変わらずうるさいとこだぜ！

だがそこにしびれる憧れるう…！…じゃなくて！早く探さないと…！

しばらく捜してみるがなおとの姿は見えなかった…

どうやらここじゃないっぽいな…

別の所を…んっ？

ふと見るとここは格ゲーコーナー。

最近あんまりやってなかったからな…ちょっとくらやってこっかな…

俺は一番得意なやつの所に座る。

そして少しレバーをガチャガチャしてみた…うん！久びさだな…

さてと…やるか！

お金を入れるとギヤーン！と効果音になる。

よし、まずはアーケードだな…裏コマンドを入力、と。

このゲームはタイトル画面時に裏コマンドなるコマンドを入れると敵キャラが異常に強くなる仕様になっているのだ

……………ピロン！

この効果音がコマンド受け付けの合図だ

OK！じゃあやるぞ！

最初にキャラ選びだ。俺は気に入ってるキャラを使う

OK！準備は整った！

相手は誰だ…？

ドギヤーン！

フウ、コイツか

カウンターハメでいくかな…

『ラウンド1！ファイト！』……………

俺は軽快に勝ち進んでいった…

CPUにやられるほど俺は甘くはない！

さあ次の相手は…？
と思つた瞬間！

『ニューチャレンジャー！！』

派手な効果音と共に派手な文字が…

フウ、挑戦者か…いいだろう！受けてたつ！

相手は…フウ…中々上級者向けのキャラだな…俺と同じ、カウンタ
ータイプだ…！

『ラウンド1ファイト！』

先ずは様子見…

前進とバックステップを交互に行う。ここに突っ込んで来た所に力
ウンターをぶちこむ！あいにく俺のキャラは屈K最速！
カウンターボーナスでダメージ二倍！

さあどうする…？

すると相手は…飛びこみ…！ちっ！しゃがみガード無効か…！
仕方ない！対空！

…なっ！？空中ガード！？クソッ！コマンドガードか…中々硬いな！

俺は感心している場合ではなかった！

何と相手はコマンドガードからのキャンセルで次の技のモーションをカット！

ジャンプKを喰らう…！くっ…先制か！しかも着地屈P連からのキャンセルコマンド技！

やばい！ゲージの四分の一は喰らってしまった…！

俺も負けちゃおれん！

喰らえ！起き上がりコマンド！

しかしガードされる！

読まれていたか…！

だが甘い！相手のキャンセルより早くこちらのコマンドを入力！相手のキャンセル技を喰らう前にカウンター成功！これで終わると思うな！カウンター技をキャンセルし、コマンド入力！一気に運ばせてもらうぞ！

俺はコンボでたたみかける！よし！打ち付けダメージ！コンボボーン！
ナスでダメージ、一・五倍！

起き上がりくるな！おそらく俺と同じ方法でくる！俺のコマンドガード後に カウンターを狙ってくる！先ず一発目は通常ガード！そして二発目はコマンドガードで俺がカウンターを決めてやる！

…！！完全に読まれた！投げかよ！！ちっ！投げ抜け失敗！最近投げられてばっかな俺……………

おっと！やばい今は立場逆転だ！俺が壁際ダウン中！さあどうするか…？

よし！このキャラの性能を存分に生かしてやる！

先ず起き上がりだ

屈K連打を決める！さっきもやったがコマンドガードは二発以上の攻撃には効果はない！故に速攻キャンセルを決めなければならない。だが俺の屈Kは全キャラ中最高の速度！一発目を防がれキャンセルをされる前に二発目を打ち込む事ができる！

先ずはそこまでだ！

作戦開始！

起き上がり屈K連打！やはりガードされたか…更に通常ガード、コマンド技でないから削りも出来ない！だがOK！間合いを作る事に成功！よし次！俺は壁ジャンめくり！対空はさすがにしていけないか…だがOK！めくり成功！

何か最初の作戦と全然違うが…まあいいや

屈K！ガード！投げ！投げ掛けからのキャンセルコマンド！コマン

ドガードキャンセル！ガード！コマンド！コマンド！……！！

…ハア…ハア…中々やるな…！

お互いライフは残りわずかだ…
さあどつくる…？

…！よく見たらゲージMAX！必殺技行けるな…

これでKO狙うか…

先ずは前進バックステップの連打！
相手を誘う…！

…飛びこみ！先ずは対空！相手は案の定コマンドガードだ！
これが狙いだ！俺はその対空をキャンセルし、必殺技を打ち込む！
読みが甘かったな！

とどめだ！喰らいな！

フウ…必殺技コマンドを入力し、勝利を確信…のはずだった！

しまった…相手もゲージMAX！！！！

何て間抜けなミスだ！

やばい…キャンセルが…来る…！

うわあああ！！

出だし無敵かよおおおお！

ぐはああああ！！！！

……………

結果は惨敗…

自信はあったのに…

…俺を負かしたやつはどんなやつなんだ…？

俺は席をたつて相手側へいつてみた

…！まさか…また女性の方…！？

そこには俺との勝負に勝って得意げに友達に話している子がいた…

「ほら！勝った！この手のゲームでは負ける気しないんだよね。」

「何よ。こつもけつこつ危なかったじゃない。」

「勝ったんだからいいじゃん…！ん？あつ、もしかしてキミ今の人？」

なんだよ…俺最近まけっぱだ…どうしたらいいんだよ…くそっ！
んで俺が…っておっと！

「えっ！？あつ！はい…どうも…えと、参りました。完敗です…」

気づかれてしまった

「んっ？キミも中々強かったよ？ でも私にはちょっとなかな
かったな！はははは」

…ここまで言われるか…負けたのは事実なんだが…

俺はちよつとムツとなる

それに気付いたのかもう一人のポニーの子が、

「ちよつと…言いすぎじゃないの？恥ずかしいわよ…」

と小声でこう…？と 呼ばれる子に言う

「えっ？ああ…ごめんキミ、ちよつと言い過ぎたかな…」

少し申し訳なさそうにする

「えっ！いえ、負けたのは事実ですしね…。じゃあここで失礼しま

すわ……。……あつ！！！！」

急に大きな声を出したので二人が驚く

「しまった！なあと……！すみません、この辺でえつと……身長は俺くらいで金髪、で中タイケメン……で、ちょっとかわいい感じの男見ませんでした？服装はたぶん……ボーダーライン入った感じのシャツ来てると思うんですが……！」

俺は慌てて二人にきいてみる

「へえ。ちょっとかわいい感じの男子ね……キミと仲いいの？」

こうさんとやらがきいてきた。聞いているのはこっちなんだが……まあいいや

……仲がいいかどうかは知らんが慕ってくれてるしな……

「ええと……まあまあです。見ませんでしたか！？」

「ひょっとしてそのイケメン君とは付き合ってたりする？」

……？

「……は！？」

「ちょっと……こう！」

「冗談冗談！ ……うん見てないねえ」

何を言い出すんだこの人…！つと！早く捜しにいかないと…

「そうですか…どうもです！じゃこれで！」

「うゝす」

俺はよくわからん人と別れてゲームセンターを後にする…

……………ハア…ハア…なおと！ホントにどこにいるんだ…！？

何で携帯通じないんだ…？

一体…

…！…！…！

そうだよ！簡単なはなしだ！

ホビーショップに行けばいいんだ…！

あいつの行きそうな所考えたらそこしかない…！！

俺は急いで向かう…

とあるシヨップ

おお久びさに来たなー！

ここはまだ俺がオタクとして目覚め毛のはえたくらいの時にじゅん連れてよく来てたな。

つと感傷に浸ってる場合じゃあない！

ってかここにホントにいるのか！？

店の中でもめ事起こしたら警察呼ばれるだろうし…

そんな感じにも見えない…

まあ人にきいてみるか……………んっ！？あれは！！！！

明らかに挙動不審なやつが…奥に……………！！

それは俺に気づくともものすごいスピードで接近してきた！

「アニキ————！！！！来てくれたんすね————！！」

ええええええええ！？

お前無事じゃん！
なんだ！？

やばい！突っ込んでくる！

避けるか！？いや、後ろは商品が！

そ、そのくらいはさすがのなおとでもわかってるだろ…

…いや、わかってない！！コレはマジで突っ込んでくる！！

どうする！？突撃したらこのスピードだ…殺られる！

ちよっ！！誰か止めるよ！おい誰か！！

「そうやってまた他人任せか？逃げんなよ。ひろ…くくく…」

……………っ！！

…ええい！ままよ！！

俺は一気に踏み込みなおとの腹まで姿勢を落とす！

そして横に素早くズレ、腕をなおとの腹に！！！！！！

耐えろ！俺の腕！！

グンッ！！！！

「ぐえっ！！！」

………っっ…

…止める事ができたようだ…

悪く思っな…なあと…

「あ、アニキ…」

なおとはピクピクなってる…

………毎回毎回なんだよ…言われなくてもわかってんだよ…クソッ…

「っで、何の用があつて呼んだんだ？」

なおとを問い詰める

「…すみません…ちょっとだけお金を貸していただくこと…なんて思ったりして…あははは…」

フウ…全く…

「じゃあ何であんな訳のわからん電話したんだ…？普通にすればよかったろうに…」

「ホントにすみません…普通にしたんじゃ来てくれなにかと思って…」

………

「バカ野郎…俺とはまだ会ったばかりだからまだわかんないかもしれないが、少なくともなおとは俺のことを慕ってくれてんだ。そんな奴を見捨てたりするほど俺は冷たくはないよ。」

…恥ずかしいが、まあ…本音だな…

「例えそれが創りものだとしてもですか…?」

………?

「すまん…今何て?」

俺はてつきりアニキー!とか言ってまた抱きついてくると思ったのだが…

創りもの…?

「いえ…何でもないです!とにかく来てくれてありがとうございます!お陰でこのグッズが買えましたああ!感謝です!アニキ大好き!!--!」

………何なんだ…?

「あ、ああ…よかったな!買えて…」

…??? ???

「どうしました…?」

心配そうななおと…

気のせいだったのかな…?

「いや、何でもないよ…。それよりお前こついうのも好きだったのか?」

なおとが買ったものは美少女系のキャラがたくさん出てくるアニメのグッズだった…

てつきりコイツは戦隊ヒーローものが好きだと思っていたんだが…

「はい!大好きですよ!見てくださいこのツインテ!ツンデレ萌え~です!」

……気にすることはないか…きっとゲーム疲れだな…さて!テンション上げてくか!

「フウ…そう言う話なら負けてられないな!!さあ!論じようじゃあないか!…!」

「むう!こつちも負けませんよー!」

こうして萌え論議が始まった…店の中で…

「だ・か・ら！！時代は貧〇なんだって！！」

店によからぬ言葉が響く。

声の主は迷惑を考えていないよう…

「いいや！アニキ！！そこは譲れませんよ！おれは絶対巨〇っすよ！！」

「バカ野郎！でかいのどこがよい！！考えてみる！想像するんだ！お前ツンデレ好きだろ！ほらっ！スポーツも出来て成績優秀！いつもは強気な委員長！！しかし彼女は胸が小さい！！彼女はそれをきにしてる！！自分はその委員長の彼氏と仮定する！人前ではツンツンされるんだ！そこまではわかるだろ！？そしてイザという時になった時に……………」

「ゴクリ…ズバリいざというときは…？」

「フフン…！それは言わずもがな！ショータイムだよ！ シャルウィーダンスだよ！目の前で彼女が身に纏いし聖なる衣を一枚、また一枚と自らの手で脱いでいくんだ…！そして最後の砦が崩壊したとき…！彼女は顔を赤らめ胸を隠し…こう言っんだ……………！」

『わ…私、あんまり大きくないから…その…え…と…恥ずかしい…』

てなああああ！！！！！！」

「うおおおおお！アニキー！俺が間違っていましたー！！時代はやっぱり貧・〇・ですー！！」

あつ はははははははもう最後のほう関係ねえや！……あつ はははは
ははは！！！！！！！！

「そうか！わかってくれたか！俺は嬉しいぞー！！！」

ソコで俺たちの友情はより一層深まったのである……

一つ言おう。こいつらはバカだ。

……それから店を出て（店の人達からはスゴく冷たい視線で見られてしまった…しばらくは行けないな…）二人でブラブラと町を歩いて俺たちは別れることにした……………

「アニキ！ホントにありがとうす！」

「構わないよ。それより今度から普通に話せよ。敬語とか使わなくていいからさ。」

「えっ、でも…」

フウ…やっぱり急に喋り方変えるのムズいよな。俺がもつと最初に言っとけばよかった。

「気にすんなよ！俺たち激論したろ？対等だよ！対等！それに友達じゃん。敬語なんていらない。なっ？」

「…はい！…じゃなくてうん！わかったよ！そうするね！」

少しドキツとした。コイツ…男のくせにかわいいな…何でオタクなんてやってんだ…

「おう！よろしくな！そんでもってじゃな！なおと！…」

「うん、よろしく！じゃあね！ひろー！…」

そのまま俺たちは笑顔を交わし、わかれていった…

俺は駅から出て家に帰っていく…フウ…肌寒いな…まあ季節が季節だしな…急いで帰る

俺は少し急ぎ足で家に向かう…

『柏木…ひろ…』

……ん…？
名前呼ばれたか…？

俺は振り返って見ると長い黒髪オリブドラフの少女の後ろ姿を確認できた……

「…あの子かな？」

…そんな訳ないか…」

今日は何か変な日だったな…まあいいや明日も休みだ。テンションあげてこー！！

俺は急ぎ足で家に向かう…

物語は変わり始める…

欲は抑制しがたし嫉妬は醜し（後書き）

.....
フウ.....

少し口が過ぎたる.....だから罰を与えてやったんだ.....

物語は俺の手によって左右される.....

柏木ひろ.....

気をつけなよ.....？

俺は.....嫉妬深い.....

懐かしきはあの場所（前書き）

俺が全部悪かった…

俺のせいなんだ…

全部全部！！

俺のせいだ…

憧れは醜い嫉妬に変わる…

柏木ひろ…俺がそっちにいったら先ず最初にお前に謝るよ…

そしていつしょに...な？

懐かしきはあの場所

おはよう！朝です！日曜です！！！！

今日はいい天気だな

カーテンを開けると一瞬眩しい

ポカポカ陽気だ…

…こんな日はお外で元気に遊ぶのが一番！！！！

よし！というわけで今日は勇気を出して小早川さんと岩崎さんを誘う！！

…女の子を誘うなど…緊張…する…

ハア…こんな俺にそんな偉業が成し遂げられるのか…？

が、がんばろう！！
行くぞ！！……………。

アアアア！！！！恥ずかしい！！！！後はこの電話マークを押すだけなのに！！！！

「…てめえには無理だ。諦める。」

…おはやい登場で。

こんなところで怖じ気づいてたまるか！

ピッ！プルルルルル！プルルルルル！

ああ掛けてしまった！！もう後には戻れない…

プッ

「もしもし。小早川です。」

うわぁかわいい声だにゃ〜！！ きもっ

「あっ！…っと！もしもし。柏木です！おはよう！」

フウ…噛まずに言えた…

「あっ！ひろくん！？おはよう！久しぶりだね！どうしたの？」

久しぶりなのかな？

「ああ、久しぶり！え…と…今日は暇…かな…？」

こんなもんでよいだろうか…

「今日…？うーん特に用事はないけど…あつ、今みなみちゃんがこっちにいるよ！」

！！！！

岩崎さん…いましたか…！！

「えっ？岩崎さん！？そうか…うん！小早川さん！今日、川にいます！」

言えたああああ！

「ええ…！？川！？この季節に川なんかいたら寒いんじゃない？」

やっぱりそうだな。普通はそうなるわ…じゃんの時もそうだった…だが俺はこう言っただ…！！

「ダイジョブ！川に入るの俺だけだから！」

フウ…張り切りすぎたかな。

何とか誘うのには成功したがちょっと早く来すぎたかも知れない…

俺は自転車に乗ったまま小早川さんたちを待つ…

しかし、小早川さん達は以外に早く来た…俺の知らない人を二人つれて…！！！！

小早川さん達が挨拶をしてくる

「おはよう…。」

「おはよう！ひろくん！」

「ああ…お、おはよう！今日はごめん休みの日なのに。」

「全然いいよ。所で…ホントに川に入るの…？」

「もちろん！男に二言はないのさ！……所で……そちらの二人は……？」

ものすごく気になっていたので聞いてみた。

「えっと……紹介するね。留学生のパーティちゃんとクラスメートの田村さん。」

「ハーン どうもデス」

「は、はじめましてっス！」

二人に挨拶される

………？二人とも見たことがあるな……

「あ、どうもはじめまして柏木です。」

「OH！ ナニをイってるんデスカ！？アってますヨ？」

ピンときた！

「あっ！あの時の！ミク〇さん！？」

「ピンポン！セイカイでース！あのトキはどうもアリガトでス！
パトリシアマーティンでス！よろしくネ」

うおう…さすが外人さん…色々ダイナミックだな…すまんなおと…
俺は貧〇好きだがコレは無視できん…！！！！

「よろしく！…え、とそちらは…間違つてたらすみません。昨日あ
つてますよね…？」

俺はもう一人の女の子に尋ねる。

「…はい！あつてるッス！昨日はすみません！！」

………はっ！？
何で謝られる！？「何で謝るんすか…？」

俺は驚愕の事実を耳にする…

「実は…昨日ずっとつけてました！！」

ま、マジかよ…！？

「えっ！？どういっ…？」

「実は昨日私あのショップにいたつス…それで公共の場で熱い抱擁を交わしてある柏木くんがいたもんで…」

げっ！

まさかちょうどのワンシーンを見られてるなんて……！運がわるい……！！！！！！

「ちよっ！！あれは違う……！あいつが突っ込んでできたから……」

「くはっ……！ つ、突っ込んで……ってことは柏木くんは受け……」

「えっ！？何でそうなる！何故に初対面…かな？の人でここまで妄想が広がるんすか！？ちよっ！きいてる…！？」

「うふふふふふ」

「ひろ、こうなつたひよりはダレにもとめられません。アキラめてレッツゴー デス!!」

「えっ！？待って！ええええええ！？」

小早川さんと岩崎さんの頭には？がたくさん浮かんでいるのが見え

る……………

そして俺たちはその10分後、出発する事になった（妄想ワールドに入った田村さんを正気に戻すのに時間がかかったのだ…）

…出発して30分経過

「ハア…ハア…ひろくん…あとのくらい…？」

小早川さんが息を切らしながら聞いてくる。

そうだな…大分走ったから疲れるよな…

「もうちょいかかるんだ。

ソコで休憩しよう！」

ここはもうすっかり田舎だ…

丁度いつもじゅん達と休む場所に着いたので俺たちは休憩をとるところにした…

そこには小さな屋根があり、屋根のしたには背もたれの無いすがある。

その近くには小さな川が流れていて休むのにはもってこいの場所だった。

もつとも今の季節川に入る人などいない…

俺たちは自転車をとめ各々椅子にすわる。

「うわー。空気がきれいなとこだね！」

小早川さんが深呼吸をする

「だろー？ここよく友達とくるんだ。夏はその川で少し水浴びてくんだけどもう寒くなるからなー。」

「へえー…ひろくんこついうとこ好きなの？」

小早川さんが尋ねる

「イエス！大好きさ！」

「おフタリさん！カンショウにヒタるのもいいですが、スワってお

ベントウにしまショウ」

おおー！パトリシアさん…

「そ、そうだな…せっかく小早川さん達が作ってくれたからな。食べないと！…それにしてもよく「感傷に浸る」とかいう言葉知ってるね…」

日本語ペラペラだが一応外国人だよな…

「ハイ！ワタシニポンのマンガやアニメディスクでしてそこから二ホンゴマナびましタ！ひろはオタクですネ！？」

ああん！もう！間違ってないけど今そういう話じゃないでしょ！まあいいけど…

「ま、まあね…あはは…そ、そんなことより！弁当食べよ弁当！うわあ美味しそう！…！…うお…マジで美味しそうだな…」

「頑張ってみんなで作ったんだー！男の子だからたくさん食べると思っ…お姉ちゃんにも手伝ってもらってね！」

！

「ありや？泉先輩いたの？まあいいか…じゃあ頂こうかな！あつ！田村さんも座って食べようよ！…昨日のことなんて気にしてないからさ！」

遠慮がちだったので田村さんを誘う。段々俺もなれてきたかな…？

「う、うん…ありがとう。」

まだちょっと気まずいかな…？

まあ…その内慣れるだろ…

「みんな座ったし、じゃあいただきます！！！」

ああ…美味かった…俺は腹いっぱいだ…ちょっと動けないな…

「だ、大丈夫…？」

岩崎さんが心配してくれる。ありがとう…優しい岩崎さん…

「俺は大丈夫…こんくらい平気平気！おいしかったしね！ごちそうさ
ま。」

みんなはニッコリ笑って返す。

「お粗末さまでした！」

「ごめん…もうちょい休むからさ…みんなはそこら辺見てきたらいいよ。あんま遠くは駄目だけど。」

俺がそういうと小早川さんたちは

「じゃあちよつと川の方行ってるね。行こ！みなみちゃん！パティちゃん！…田村さん…？」

…田村さんは少し様子がおかしい。

「田村さん、大丈夫…？」

小早川さん心配そう。

「へっ？あつ！私も休んでるから3人とも行ってきて！」

「…じゃあ行ってるね！すぐ戻ってくるから！」

「フタリだけでヘンなことしちゃダメすヨ？」

「パ、パティ…！」

「パトリシアさん…！」

そう行つて三人は川の方へ…

俺たちは二人きりになる。

「田村さん…？ホントに大丈夫…？調子悪くなつたらいいなよ？」

どうも元気がない…

「あつ…私は大丈夫ツス…所で…『柏木ひろ』って本名…なのかな…？」

…？

よくわからないことを聞くな…

「え…そうだけど…何で…？」

「『杉浦ひろき』って名前の人…知ってる…？」

……………？……………！！

「そうツスカ…じゃあもし知らなかったとしても…もしその人が話かけてきたら…うん。ちゃんと話、聞いてあげてね。…あっ！変な話してごめんね？」

「ただ…何が言いたいんだ…アイツは…？」

「柏木くん？」

「あっ…ごめん。うん、わかった。杉浦…ひろき、だね…覚えとくよ…」

「絶対ツスよ！？よろしく！」

握手を誘われる

「お…またか…！」

「やっぱりちよつと緊張するが…せつかくだ…！」

「こちらこそ！」

「俺は田村さんと握手を交わす…」

しかし、その握手には違和感があった。

握っている手は確かに田村さんのものなんだが…

田村さんは誰と握手してるんだ…？俺じゃない誰かと握手をしている…そんな錯覚にとられるような握手だった…

「ただいまモドリましター…ってアー！ナニやってるんですカ！」

！！！！

みんな戻ってきたようだ…！

「えっ！？何って…ただの握手よ！？握手！パティ！」

「ホントですカ？」

ニヤニヤとパトリシアさんが見てくる

はっ！

「小早川さん！岩崎さん！別に変な意味じゃないんだよ！？仲良くしようって意味で…」

必死に弁解する俺

「わあ！よかった！二人ともあんまり喋らなかったからちょっと心配してたんだ…。でも仲良くなれてよかった！ね、みなみちゃん！」

へ…？

「うん…私もちよつと心配だった…」

必死に弁解していた俺がバカだった…そうだ…このふたりはクインオブザピュアだった！心配した俺がバカだったぜ！

「あ、ああ！よかったよ！うん！仲良くなれてよかった！な、田村さん！」

ここで田村さんにふる

「えっ私！？お…えと…そうっスね！よかったッス！よろしく！柏木君たち！よかったッス！仲良くなれて…！あはは…」

とりあえず笑って誤魔化すことに…

小早川さんたちも笑っているが一人だけ…

「ナットクできません…！」

一人だけ…

そうして俺たちはまた川を目指し出発した……………

「着いたああああああ！！みんな！お疲れさん！到着したよ！ここが俺がいつも来ている川！通称『あの場所』！！」

「わー…！きれいなとこッスね…！！」

「そう！自然もいっぱい！きれいな空気たくさん！！俺はこの場所がだいすぎだ！！」

はい！！噛んだ！！

ここはその通りとてもきれいな所である…

川も上流だから汚れていないし、木もたくさんある。

オマケに田舎で車も通らないから空気もきれい！！

静か！

とてもすばらしい場所である！

こういう自然がたくさんある所はいつも大切にしたいものである！

「普段は仲いい友達としか来ないんだ。でも小早川さん達ならいいかな、と思って…どう？」

「うん！ありがとう！！スゴく良いところだね！苦労してきたかいがあったかも！」

「すごく静かで落ち着く場所…私こういう場所…好きだな…」

「こういうシゼンもニポンのいいところですね！」

「ふぉー…いいアイデアが浮かびそうかも…」

おお…思ったよりも好評でよかったあ！

でも最後がちょっと何か……………アイデア……………？

「…え？アイデア？」

田村さんに尋ねてみる

「あ、私未熟ながら同人誌かせてもらってるツス！ジャンルは…
まあそれぞれツス！あはは…」

「田村さんは絵がすごく上手なんだよ」

と、小早川さん。

さっきの様子から田村さんの好きそうなジャンルは大体わかる

「へえー…そうなんだ…今度は是非見せてもらいたいな。」

俺は田村さんにそういつてみる

「えっ…あ、そうかあ…まだ柏木君はみた事ないからね…って無理
ツス！恥ずかしいツス！！それだけはお許しをー！！」

ははっ！やっぱりおもしろいな！

俺は思わず笑ってしまふ。

みんなもつられて笑う。

何か……………楽しいな。

「フウ…じゃあそろそろ行きますかね…!!」

「カンチュウスイエイのハジまりですネ!!」

「ホントに大丈夫？ひろくん…」

小早川さんが心配してる

「OK大丈夫！じゃあ行ってくる…ってパトリシアさんはまた「寒中水泳」で…ちょっと違う…」

まあ気にしない！気にしない！

俺はまずシャツを脱がないと…

!!

しまった！

女の子しかいないのに上半身裸って…！！

は、恥ずかしい！

…よし、服きたまま行こう…でも帰りが寒い…

ど、どうすればいいんだ…

！！

うおう…みんなはなんか「まだかなあ」みたいな目で見てる…！！！！

…っおおお！

勇気を出すんだ！

てい！

…っう…寒い…

「おおー！中々いい体してるっスね！勉強になるっス！」

田村さん…

「…まあ…行ってくる!!」

俺はガーツと走って川に飛び込む!!

ザバーン!!

「うわああああ!!!!寒い!!!!」

「今日は楽しかったね」

小早川さんが言う。

「そう!?それはよかったよ。」

俺はあの後心臓麻痺をおこしそうになった…

「やっぱりもう冬になるな…あつ！冬と言えば小早川さん！誕生日じゃないか？」

12月は小早川さんの誕生日がある月じゃん！

「え…何で私の誕生日ひろくんが知ってるの…？」

「何でって…え…？何で知ってるんだ…？俺…」

「俺が知ってるんだ。お前が知らない訳がないだろ…？くくく…」

…！！！！

「えっと…！ほら、私が教えたの！誕生日プレゼントとかあるっスから！ね、柏木くん！！」

田村さんがフォローする。

…そうだったかな？

「あ、ああ…そう言えばそうだったね。田村さんから教えてもらったんだよ！」

「えっ？そうなの？いいよープレゼントなんか。ひろくに悪いし…」

「いやいや、誕生日プレゼントは形で表現するのが難しい友情の表現の一つ！遠慮なんかしないでいいんだよ？」

これは俺論の一つである。

「え…友情…」

小早川さんが少し寂しそうにする…
何か変なこと言ったか…？

「ハア…ひろはオトメゴコロってヤツがわかってませんネ！」

は？オトメゴコロ…？

「ちょっと！パティちゃん！」

小早川さんが顔を赤らめて言う。

「OH！ソーリーゆたか！」

「えっ…ごめん…。そのオトメゴコロがわかってなくて…所でオトメゴコロって…何？」

「「え…？」」

俺は相当鈍いようだ…

「じゃあまた今度！」

「じゃあ…」

「グッバイひろ！ひよりん！…！」

俺は三人とここで別れる。

「じゃあまた！今日の所は忘れないでね！！」

「また明日！！」

…田村さんが話があると言ったので俺は残ることになった。

「…で話って？」

あまり触れなかったが今日はよくわからないことがたくさんあった。

田村さんという人は世間的に言えば不思議ちゃん、なんだろう…田村さんには悪いが…

「実は杉浦くん…あ、ごめん、柏木くん…私と柏木くんは何回もあつてるんすよ…」

…？

また「杉浦」か…

「…どういこと？」

意味がさっぱりわからない…何故俺を杉浦とかいうヤツと間違える…？

俺は田村さんと面と面向かって話すのは今日が初めてだ

「ホントにわからない！？私とは昔から結構あってるんだよ！！私が同人誌描いてるってことも知ってるよね！？やっとな杉浦くんがどんな顔やどんな恰好してるかわかったのに…ねえ杉浦くん！思いだしてよ！！」

…っ！！また杉浦か…

わからないわからないわからない…！！

「ごめん田村さん、少し言葉がきつくなるかもしれないけど単刀直入にいうよ。俺は杉浦じゃあない。柏木だ。杉浦なんてやつは友達にもいないんだ。それに顔がわかったってどういうこと…？田村さんは顔も知らないやつと話をしたのか？僕がその杉浦ってやつだっという保証は？」

僕…？

「…あ、ご、ごめんなさい…ちょっと熱くなったツス…でも杉浦くんは言ったよ…もうちよつとで会って直接はなせるって…今度は面と面わかってネタの話とかも出来るって…私…男子とはリアルであんなり話とかしたことなかったっすから…住む次元とか違ってもおんなじ「創る」側の立場だったから…ちよつと嬉しかっただけ…」

創る…？

また創る…

創るってなんだ？
創造するってこと…？

誰を…？

俺…？

俺は創られた…？
そんな…

俺を作ったのは父さんと母さんだろ…

「違うさ…！お前を創ったのは他でもない…俺だ…！！」

「違う…そんなことがあるわけないんだ…あつてたまるかよ…俺は
柏木だ！！柏木ひろだ！杉浦じゃない！！創られただど！？ははは
はははははははは！ふざけるなよ！じゃあなんだ？俺が今まで歩ん
できた人生はお前が創ってきたってのか？俺がオタクになるのもお前
が決めたのか！？俺がお前ならそうはしないな！もつとかつこいい
趣味を選んでもつとかつこいい容姿、にしてるよ…！！べつに今の
自分に不満があるわけじゃないけどな…！！」

くっこんなヤツに負けてたまるかよ…

「中々おもしろいところ突いてくるじゃねえか…だが一つ間違ってる…」

間違いだと…？

「なんだよ…」

「俺が教えるとおもつか…？笑わせんな！」

…意味がわからん…

「柏木くん…？」

…はっ！

「…あ、田村さん…」

「大丈夫っスか？何か急に黙って…」

「ごめん、大丈夫…」

…また飛んでたな…

俺は身体中から嫌な汗が出ているのを感じた…

一体この田村ひよりという人物は俺の何を知ってるんだ？

ひよつとしてこの人は知ってるのか…？

「俺の中」、を…

「田村さん、もう一回聞くんよ？俺のことを「杉浦」だっと思っつのは何故なんだ？」

俺は真剣に田村さんに尋ねる。そこに答えがあるのかも…

「…柏木くんは杉浦くんと似てる所があるっス。例えば柏木くんは川や自然が好きだよな？杉浦くんもそうだったんだよな…いつもそ

んな話を嬉しそうにしてた…あ、こっちからも質問していいかな…？」

杉浦は自然が好き…？確かに俺は自然が大好きだ…でもそんな…偶然だってある…

「ん、ああ。いいよ」

「柏木くんは格闘技とか好き？あと何か武道を習ってたとか…」

！！！！！！！！

まさか…初めて会う人にここまでの得た質問をされるなんて…！！

「うん…格闘技は好きだな…見るのも好きだしやってみたいと思う。あ、僕はつい最近までは剣道やってたんだ。あんまり強くはなかったけどね…」

僕は実際かなり弱い部類じゃなかっただろうか…試合でもあまり勝った記憶がない…orz

そう聞いた田村さんはものすごく驚いていた…

「やっぱり！…杉浦くんも剣道やってたって言ってたッス！！私はあんまりわからないけど…格闘技とか好きって言ってよく話してくれたッス！」

杉浦…ひろき…一体…僕は別に小さい頃の記憶がないわけじゃない。むしろ鮮明に覚えているくらいだ…！だから僕は杉浦じゃないんだ…！！

「そ、そこまで僕にそっくりな人がいるのか…驚いたな…。」

きつとこれは偶然だ…偶然だよ…！！

「それで極めつけはこれ！柏木くんは小早川さんの誕生日を知ってた…！」

…！！

どうするよ…！！

こればかりは何もわからない…！！

「……………田村さん、これはどういうことなんだろ…何で僕が小早

川さんの誕生日を……？」

もう頭がクラクラする…

「杉浦くんは私たちの誕生日を知ってるっス…きっと柏木くんは私の誕生日も知ってるんじゃないかな…」

僕がそんなの知ってるわけ…

「5月……24……」

「正解…。わかったかな…私が柏木くんを杉浦くんだと思った理由。」

……僕は柏木じゃないのか…？だとしたら田村さんは残酷だなあ…
僕という人間を否定して僕が杉浦だなんて……

これは夢か…？
一体杉浦って誰なんだ…？

……………杉浦って誰だよ!?

一番大事な事をきいてない!!!

「田村さん!最後に聞くよ!?杉浦って誰だ!?さっき言ったよね?顔がわかったって!!田村さんは実際に杉浦にあった訳じゃないのか!?何でその杉浦は田村さん達の誕生日なんか知ってるんだ?教えてくれ!杉浦ってやつは一体どこのどいつなんだ!?」

そう言う彼女はスゴく困惑してしばらく黙っていた…

僕も黙って目で訴える…これだけは知らないといけない。

僕の中にいるヤツにギャフンと言わせてやるんだ…!!

「…ひろ……………」

……！？

「……柏木ひろ……やっとお前に干渉出来た………」

「誰だ！？お前なのか……！？」

「もう少し……もう少しなんだ……」

「おい！いつもの元気がないぞ！？どうしたんだ！？」

……返事はもうなかった……

「柏木くん……」

ようやく田村さんが口を開いた。

「私が知ってることの全部をはなすね…きっと信じてもらえないかも知れないけど…私の事をおかしい人だと思うかも知れないけど…」

フウ…全く…

「僕はそんなこと気にしないよ。杉浦ってヤツはその話を聞いて田村さんをおかしいと思うようなヤツじゃないだろ？僕がその杉浦ってやつなら僕はそうは思わないな！田村さんの話を信じるよ！」

自分でも全く何を言ってるのかわからないが、杉浦ってヤツは間違はなく田村さんの事をおかしいと思わないだろう…

それは僕が田村さんをおかしいと思わないことと等しい。

今… たった今… 繋がった… 嫉妬が消えたんだ… 今初めて感じた…

あいつの存在を……！

「ありがと…！じゃあちよつと長くなるかも知れないけど頑張ってくださいね！」

「どんどん！ー！」

俺は真実を受け入れる！

懐かしきはあの場所（後書き）

ついに柏木ひろが真実を…か…。

つまんねえな…

何にも知らないあいつが困惑するのを見るのが楽しかったのにな…

柏木ひろは目覚めていつて…

あいつという一人の人間として…

まあ…この謎が解けたらまた楽しい日常が送れたらいいな…

まあ…俺がいる限りそれはないがな…

たかが嫉妬は物語を変える…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0060o/>

Lucky staR ~ 俺の人生を変えた物語 ~

2011年10月8日01時09分発行